連合２０２４平和行動 in 沖縄　参加報告

小田原・足柄地域連合　副議長　上野山元喜

１．日時：６月２３日（日）～２５日（火）

２．会場：沖縄県内

３．参加体制：連合神奈川として
・前島（連合神奈川副事務局長）　・阿部（連合神奈川局員）
・蒲原（連合神奈川青年委員）　・鬼塚（連合神奈川女性委員）
・鈴木（横浜地域連合：全水道）　・出濱（県中央地域連合：自動車総連）
・上野山（小田原・足柄地域連合：神教協）

４．参加内容

１日目　６月２３日（日）１４：３０～１７：００　平和オキナワ集会（那覇文化芸術劇場）

・オープニングイベント　山里青年会によるエイサー

地元の青年会によるエイサーが披露された。沖縄では依然として若い人たちが主体的にエイサーなどの伝統文化を継承・保存しているという話があり、地元のことを自分事として捉えていることを感じさせられた。

・記念講演　「再考・日米地域協定～標的の島からの警告：米軍、軍拡、憲法、自衛隊～」
前泊　博盛　氏（沖縄国際大学教授）

前泊教授からは、日米地位協定によっていかに沖縄が負担を強いられているかについて、多角的な視点で講演を頂いた。米軍による暴力事件や墜落問題などの危険があるだけでなく、台湾有事が叫ばれる中、沖縄が優先的に攻撃対象になっていることも大きな課題となっている。また、米軍が演習時に利用しているPFOSが海洋・土壌を侵食しているという環境問題も近年、大きな問題となっていることも報告された。これらの問題に対し、日米地位協定を理由に政府は抗議すら行えず、沖縄は常に犠牲を強いられてきたこととともに、新しい戦前が近づいてきていることに警鐘を鳴らすべきと訴えて講演を終えた。

・平和式典

清水連合事務局長の挨拶に始まり、沖縄県副知事、沖縄選出国会議員の挨拶が行われた。
その後、中曽根連合沖縄会長から大野連合広島会長にピースフラッグが渡され、この後の広島・長崎・根室の平和行動につなげていくことを誓い合い、式典を終えた。

２日目　６月２４日（月）７：５０～１６：００　ピースフィールドワーク（基地コース）

・辺野古キャンプシュワブ
辺野古の新基地建設の現状を視察した。基地周辺には、県内から埋め立て土砂を運ぶためのダンプが途切れることなく列をなしていた。建設現場の対岸から視察を行ったが、大規模な船が建設を

行っており、重機の音が鳴り響いていた。当日は、座り込み等の運動は行われていなかったが、地元の方から基地建設による環境破壊を懸念する声を聞くことができた。

沿道には、座り込みをするための簡易テントが並ぶ。

左の茂みから対岸の海岸へ。建設現場には、大きな船が何隻も停泊。

・嘉手納飛行場

嘉手納飛行場は、極東最大の米空軍基地と言われ、広大な面積を占有している。道の駅かでなには、４階建ての展望台があり、基地の全景が望めるとともに、騒音計が設置されていた。厚木基地でも長年、爆音問題は大きな課題であるが、嘉手納も同様であるとのこと。

騒音計

・チビチリガマ

１９４４年４月１日の米軍上陸時に８４人が集団自決したガマ（壕）。自死した８４人の８割が１５歳未満の子どもたちだったという。この集団自決は、本土から来た軍人が、軍事施設の所在などの機密が漏れないように沖縄県民に「捕虜になるぐらいなら自決をする」よう求めたことが大きな原因と言われている。その結果、家族同士がお互いの命を奪うという悲劇につながった。

隣のガマには、アメリカから帰国した者がいて、日本軍の言い分がデマであり、投降すれば命は保証してくれると説いて助かっており、正しい情報判断が運命を左右したとも言われている。

・普天間基地

普天間基地のある地域は沖縄戦の最激戦区と言われ、嘉数高台には多くの銃撃戦の跡が今も残っている。高台の頂上からは、普天間基地が見え、多くの航空機が発着をしていた。この普天間基地の航空機は住宅地の中から発着を行っており、部品が幼稚園や学校に落下するなどの事故を起こしている。

銃の跡

５．感想

神奈川は「第二の基地県」と言われ、厚木基地や横須賀基地を有している。最近では、横浜ノースドックも問題となっている。しかし、神奈川県民全員が「基地県」という課題意識をもっているかと言われれば決してそうではないだろう。しかし、沖縄はどこに行っても米軍基地が見られ、全県の課題であることが強く感じられ、決して戦争の記憶は薄れていない。神奈川や小田原・足柄地域の中で平和のとりくみをすすめていくことの意義を改めて認識するとともに、単組としては子どもたちに平和教育を続けていきたいと感じた。